資　料

ふたたびロシア語版『経済学批判要綱』について (1)

山　本　義　彦

まえがき
〔凡例〕
Ⅰ　ロシア語版第Ⅰ部の「注」
〔1〕ノートⅢ
〔2〕ノートM
〔3〕ノートⅠ
〔4〕ノートⅡ（以上本号掲載）
〔5〕ノートⅢ（次号）
〔6〕ノートⅣ
〔7〕ノートⅤ
Ⅱ　ロシア語版第Ⅱ部の「注」
〔8〕ノートⅤ（つづき）
〔9〕ノートⅥ
〔10〕ノートⅦ
〔11〕ノートM、B′、B″、（特）

ま　え　が　き

ここに資料として提供するのは、ロシア語版マルクス『経済学批判要綱』の巻末ロシア語版編集者の「注」(Примечания) 部分である。これは、マルクスおよびエンゲルス著作集第2版第46巻第Ⅰ部、第Ⅱ部 (К.Маркс и Ф.Энгельс, Сочинения. издание второе. Том46, Часть ⅠиⅡ, Москва. 1968-1969гг.) におさめられている。

ロシア語版『要綱』のもつ、マルクスの経済学形成史研究、したがってまたマルクスの経済理論の把握にとっての、特別の意義についてはすでに簡略なが

ら述べる機会をもったので[1] ここで再説する要はないであろうが、ここにとりわけ「注」部分を訳出紹介する意義について、つぎの2点を再確認しておこう。すなわち、「注」部分は、まず第1に、それぞれのマルクスの原稿の執筆年代やなりたち、第2に、マルクス経済学の基本的カテゴリーの形成史についての考証が、くわしくしるされていることである[2]。むろん、部分的なマルクスの誤記と思われるもので、すでに邦訳本[3] において訳者脚注のかたちで訂正がほどこされているものと同趣旨のものも、若干みとめられる[4]。しかしそれらは、ほぼ算術上の計算間違いに類するものであるので、ここに訳出するにあたっては、その指摘を行っておいた。またいくつかの注釈には、編集上の位置変更にともなうものが含まれているので、ここでは、その事実が読みとれるように、訳者の注解を与えておいた。

(1) 山本義彦「ロシア語版『経済学批判要綱』について」(1)、(2)(『経済学雑誌』第67巻第2号〔1972年8月〕、第67巻第3号〔1972年9月〕)。とくにその「まえがき」((1)に所収)を参照されたい。

(2) 山本、前掲稿(1)、4ページ。

(3) 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』全5冊、大月書店刊)。周知のように、この監訳本は、K. Marx. Grundrisse der Kritik der politischen Oekonomie. Moskau, 1939-1941 のフォトコピーにもとづいて、第2次大戦後、ドイツで復刊されたもの(1953. Dietz Verlag, Berlin)の、完訳である。

(4) この点は高木幸二郎氏が『要綱』ロシア語版編集上において、重要な役割をはたした B. C. Выгодский 氏らと協議されたさいに、「訂正」の必要を確認して、訳出の作業にあたられたことでも知られるところである(高木氏執筆の「監訳者あとがき」、邦訳『要綱』第5分冊1356—1357ページ参照)。

(付記) 小稿は、うえに述べたことから知られるごとく、前掲拙稿「ロシア語版『経済学批判要綱』について」(1)(2)の直接の継続作業である。前掲拙稿を発表して、諸種の事情があったとはいえ、約3カ年を経て、ようやくこのような形で紹介するほかないのは、「注」の重要性について強調した事実からして、怠慢のそしりを受けなければならない。(1975.1.5)

〔凡　例〕

1　それぞれの注の冒頭の算用数字は、注の番号を示す。番号は第Ⅰ部と第Ⅱ部に分けて、それぞれ、1からはじめられているので、ここでも、それに従っている。

2　文章末尾の1字あけて「—3」とあるのは、当該注のロシア語版での位置

ページを示す。

3　文章最末尾角カッコ〔　〕内のゴシック文字は、当該注のドイツ語版および邦訳版での位置を示す。すなわち、〔**843 ⑤ 955（5—6）『トウックの物価史』**〕とあるばあい、当該注が、ドイツ語版843ページ、邦訳版第5分冊955ページ、上から5—6行目の『トウックの物価史』にあてられたものであることを示している。

4　ロシア語版では、引用著書名にも引用文にも引用符≪　≫が付されているが、ここでは、それをできるかぎり簡略化した。たとえば引用書名で原語にしたがっているばあい、ここでも原語のままとすることによって≪　≫を省いてある。例—≪The Economist≫（《Экономист》）→The Economist（『エコノミスト』）。また書名では『　』を、論文名では「　」を、引用文では「　」を使用した。

5　引用文献の中で、マルクス・エンゲルス関係のものは、邦訳『全集』（大月書店）の当該ページの位置を加え、文章もこれに統一した。例—「『哲学の貧困』（本版、第4巻、65—185〔59—190〕ページ）」とあるのは、「本版、第4巻、65—185」まではロシア語版指示、「〔59—190〕」は当該の邦訳版の位置を示すべく、訳者がつけ加えたものである。

6　訳出の上で必要となった訳者注は、それぞれ当該箇所に挿入してある。

7　マルクスのノート番号等によって、11個の節に分けてあるのは訳者が行ったもの。なお、訳文中の小見出し（ノート番号）は訳者の付したもの。

追記〔1〕前掲拙稿(1)の「Ⅰ　ロシア語版『経済学批判要綱』序文」において「手稿『経済学批判』のうち、「貨幣にかんする章」は、1935年、『マルクス＝エンゲルス・アルヒーフ』第Ⅳ巻として公刊された」（20ページ）との、編集者の序文について、三宅義夫先生から、つぎのような私信をいただいているので、一覧に供しておきたい。

—序文のおわりのところで「貨幣にかんする章」は1935年に『アルヒーフ』第4巻として公刊されたとありますが、モスクワのＭＬ研でその前の1933年に貨幣の章および資本の章の一部をドイツ語およびロシア語訳で発表しているので一寸ふしぎです。（この発表は日本でもその後まもなく翻訳、出版されましたが、戦後大月〔書店〕のマル・エン選集第9巻の訳は、この1933年本を底本としたものでした、私が訳したので知っているのですが）。—（1972年10月18日付）

したがって前掲ロシア語版編集者の「序文」は訂正の必要があると思われる。三宅先生からは、早々に、懇切なお便りをえていたにもかかわらず、公表がおくれてしまったことをおわびしたい。

〔2〕また前掲拙稿(1)「まえがき」において、『要綱』が、ドイツ語版、日本語版、フランス語版、ロシア語版で刊行されていることを指摘しておいたが、そのご1973年にイギリス語版も出ていることを追記しておきたい（The Pelican Marx Library "Grundrisse—Introduction to the Critique of Political Economy"）。この版は、1933年（1953年）のドイツ語版にしたがったものであり、リカードーにかんする補録ははぶかれている（この点はロシア語版と一致）。

I　ロシア語版第I部の注 (Примечания)

〔1〕ノート Ⅲ

1　1857年7月にマルクスが執筆した俗流経済学者バスティア及びケアリにかんする未完の草案。これはマルクスがこのノートの表紙に示した日付からあきらかなように、この草案のさいしょの7ページ〔ノートⅢの1～7ページ〕の内容をなしている。〔ノートⅢ—〕8ページからはじまるこのノートは、「経済学批判」（本巻第1部243ページ〔②、212〕参照）と表題された1857—1858年の基本的な手稿の第Ⅱノートのつづきをなすテキストである。第Ⅱノートのこのつづきをマルクスは、「ノートⅢ」としるして、「1857年11月29日、30日、12月」と付した。

マルクスの手稿においてバスティアとケアリにかんする未完の草案の表題としては草案の中で考察されているバスティアの著書の名称自体がその役割をになっていることからして、マルクスがこの書についての展開した評論を書きたいと望んだが、しかし、つづいて、この書がさらに詳細に考察するほどのねうちがないこと、したがってまた自分のさいしょのくわだてをやめて草案を未完のままにとどめたとみることができる。

ところが、我々にマルクスがのこしてくれた草案は評論のワクをこえている。そのやりはじめの「はしがき」においてマルクスは彼が当面したブルジョア経済学の内容を広汎に書いている。マルクスはここで、ペティとボアギュベールの著作によって17世紀末にはじまりリカードーとシスモンディの労作によって19世紀のさいしょの3分の1の時期に完成した古典派経済学の枠組の素描をはじめて厳密に与えている。さいきんのブルジョア経済学者に関

していえば、マルクスが示しているように、古典派のエピゴーネンであるかその反動的批判者である。フランスの経済学者バスティアとアメリカの経済学者ケアリの労作は、古典派経済学者なかんづくリカードーのまさに反動的批判の典型である。

「私自身のノートへの心覚え(レフエラート)」においてマルクスは「バスティアとケアリ」と題している。 —3〔**843 ⑤ 955 表題「バスティアとケアリ」**〕

2 J. St. ミル、Principles of Political Economy with some of their Applications to Social Philosophy. 2巻本。ロンドン、1848年。 —3〔**843 ⑤ 955 (4)「J. St. ミルの著書」**〕

3 Th. トウック, A History of Prices, and of the State of the Circulation 第Ⅰ—Ⅵ巻。ロンドン、1838—1857年。 —3〔**843 ⑤ 955 (5—6)『トウックの物価史』**〕

4 問題はバスティアの著作 Harmonies économiques 第2版14章（同書はこの第2版において、全部で25章である）にかんするものである。

バスティアおよびケアリにかんする未完の草案のこの部分はマルクスの手稿の5ページにはじまっている。先行する4ページはマルクスが中途で未完成のままにしている。手稿の1～3ページ及び4ページ上半分を占めるケアリとバスティアの一般的特徴づけを与えた前書きののちに、マルクスは、かれが検討したバスティアの著書の特徴づけを、さらに詳細に行う目的をもって、部分的には、この書のさいしょの13章について、若干言及し、そしてそのあとでまさに14章を詳述しようとしたと、推定することができる。しかしこの意図は実現しないままとなり、マルクスは14章の基本的命題にかんする若干の個々の批判的評注(クリテイーチエスキエザメチヤーニヤ)をしるすことにのみとどめた。 —10〔**849 ⑤ 961 見出語「XIV.賃金」**〕

5 バスティアによれば、「労働者恩給金庫」は労働者自身の給与の控除額でつくられねばならない。なぜなら、この条件の下でのみかれらは、「安定性」の必要水準を保証しうるからである（Fr. バスティア, Harmonies économiques 2-me édition, パリー、1851年、395ページ）。 —11〔**849 ⑤ 962 (3)「労働者恩給金庫」**〕

6 マルクスはプルードンの著書 Système des contradictions économiques ou Philosophie de la mis'ere（パリー、1846年）におけるかれのばかばかしい哲学的歴史的くみ立てを考慮にいれている。この作品は1847年にマルクスによって『哲学の貧困』（本版、第4巻、65—185〔59—190〕ページ、

とくに71—74〔62—66〕ページ及び123—127〔123—127〕ページ参照）の中で検討され一笑にふされた。 —12〔**850 ⑤ 963（12—13）「プルードンの記述的哲学的歴史学」**〕

7 Le Charivari — フランスのブルジョア共和派的志向をもった諷刺紙。1832年パリーで創刊。7月王制の時期に政府に対して激烈な非難をもって登場した。1848年に反革命陣営に走った。 —13〔**850 ⑤ 963（28—29）「セレナーデ（Charivari）」**〕

8 ヴォルテールの「宇宙の主権者」(être suprême) —ヴォルテールはこれらのことばをもって神とよんだ。かれは、それを、いわゆる「決定的な（パラジーチェリニイ）」宗教とは対立して、ある種の個性のない理性の原理として表現した。あたかも世界を創造しそれを確立した法則やそれに対して伝えられた最初の一撃のように。その結果、事態の自然的なりゆきに対するあらゆる介入を中止してしまったのであるが。 —13〔**851 ⑤ 964（10）「宇宙の主権者」**〕

〔2〕 ノート M

9 1857年秋の終わりに、マルクスが書いた「序説」は文字「M」としるされ「1857年8月23日」と日付のうたれたノートにある。この日付は、あきらかに、マルクスが「序説」にとりかかったはじまりを記している。マルクスはこの研究を、ほぼ確実に、8月末に中断し「序説」を未完成のままにした。1859年1月にしるされた『経済学批判』初版への序言で、マルクスは「序説」にかんしてつぎのように書いた。すなわち「まえにざっと書いておいた一般的序説はこれをさしひかえることにする。というのは、よく考えなおしてみると、これから証明されるべき諸結果を事前に示すことは、妨げになるように思われるからであり、およそ私についてこようとする読者は、個別的なものから一般的なものへのぼっていく覚悟をもたなければならないからである」（本版、第13巻、5〔5〕ページ参照）。

その草稿ふうで未完の性格にもかかわらず「序説」は、マルクスがここで他のどこよりも正確に、経済学（ポリテイカル・エコノミー）の対象と方法にかんする自分の思想をつくり出しており、しかもまた、社会の物質的基礎とイデオロギー的上部建築との相互関係にかんする一連のもっとも重要な考え方を述べているために、とくにいっそう大きな意義をもっている。

「序説」は、1857年10月から1858年5月までに書かれたノートⅠ～Ⅶにおいて含まれている将来の『資本論』のさいしょの草稿に、マルクスが前書き

としたのであった。

「序説」を含むノート「M」の表紙に、マルクスは「1857年8月23日、ロンドン」のしるしとはべつに、自分の「序説」の内容の目録をさらに書きつけた。個々の詳細では「序説」の篇のこの表題目録の中に入るものは、「序説」のテキスト自体の中にもっているそれらと対応する表題といくらかはちがっている。ノート「M」の表紙にしるされた、この内容目録をここに示そう。—

「内　　容

A　序　説

1）　生産一般

2）　生産、分配、交換及び消費の一般的相互関係

3）　経済学（ポリテイカル・エコノミー）の方法

4）　生産手段（諸力）と生産諸関係、生産諸関係と交易諸関係など」

「序説」のこの目次は、「序説」のテキスト自身がもっている若干の篇の表題よりも正確に「序説」の一般的論理的（ロギーチエスキー）構造を反映しているがゆえに、それは、かれが「序説」の本文に書いたものの後になって書きつけたものであると考えることができる。

「序説」のロシア語テキストは本版第12巻で示されているが、個々の訳は的確に表現されよりこまかく段落がほどこされている。　—17〔**5①5表題「A．序説」**〕

10　ノート「M」の表紙にマルクスがくみたてた目録に欠けている表題「I．生産、消費、分配、交換（流通）」は、厳密にいえば、「序説」のさいしょの2部にのみ関連している。この2部とは、「生産」の部（ノート「M」の表紙ではこの部はより正確な表題である「生産一般」となっている）と、「生産の分配、交換、消費にたいする一般的関係」の部とである。マルクスが「生産、消費、分配、交換（流通）」の部にしるしたローマ数字の「I」は「序説」の以下のテキストでは他のローマ数字とは完全に照応していない。　—17〔**5①5　表題「I．生産、消費、分配、交換（流通）」**〕

11　A・スミスの労作　An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations（ロンドン、1776年）の序説およびD・リカードーの労作 On the Principles of Political Economy, and Taxation（第3版、ロンドン、1821年）第1章第3節を参照。　—17〔**5①5（3—4）「スミスやリカードー」**〕

12 Contrat social（社会契約）とは—ルソーの学説にしたがえば—、「自然状態」のもとで原始的に生きた原始人の間の自由意志にもとづく合意である。これは国家の成立をもたらした。この理論はルソーの著書 Du Contract social ; ou, Principes du droit politique, アムステルダム,1762年で詳細に展開された。 —17〔**5①5(9)「ルソーの社会契約」**〕

13 ζῶον πολιτικόν（ラテン語の翻訳では zoon politikon）とは、文字通り「政治的動物」、より広い意味では「社会的動物」のこと。アリストテレスは、自分の『政治学』第1分冊のさいしょで人間をこのようなことばで定義している。マルクスは『資本論』第1巻第11章の注13においてこのアリストテレスの人間の定義をより狭い意味で以下のように解明している。「アリストテレスの定義は、元来は次のようにいうのである。人間は、生来、市民である、と」（本版、23巻、338〔429〕ページ）。 —18〔**6①6(13)「社会的動物」**〕

14 注6参照。以下のいいまわしに登場しているプルードンのプロメテウスにかんして、マルクスはその著書『哲学の貧困』(本版、4巻、123—127〔123—127〕ページ参照）第1章末尾でのべている。 —18〔**6①6(20)「プルードン」**〕

15 J. St. ミル, Principles of Political Economy with some of their Applications to Social Philosophy 2巻本。第1巻。ロンドン、1848年、第1分冊生産、第1章生産の要件について。 —22〔**8①8(10)「J. St. ミル」**〕

16 社会の進歩しつつある状態と停滞状態にかんして、A・スミスはその労作 An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations（ロンドン、1776年）の第1分冊第8章及び第11章への結論で語っている。 —22〔**8①8(17—18)「アダム・スミス……のようなもの」**〕

17 J. St. ミル, Principles of Political Economy with some of their Applications to Social Philosophy 2巻本。第1巻、ロンドン、1848年、25—26ページ。 —23〔**8①9(1)「ミル」**〕

18 Determinatio est negatio — 規定は否定である。マルクスはここで、スピノザのこの命題に、広く知れわたっているヘーゲルの解釈をおこなっている。スピノザではこの表現は「制限とは否定である」（B・スピノザ, 『書簡集』、手紙第50番、参照）ということばで与えられている。ヘーゲルでは（ヘーゲル『論理学』第1分冊第1篇第2章「現実性と否定」の注解、およ

びヘーゲル『小論理学』第1部「論理学」第91節補遺、参照）、ここであらゆる規定された存在、あらゆる「或るもの」に内的に固有の否定のモメントが強調されている。 —26〔**12 ① 12（20）「規定は否定である」**〕

19 「社会主義的美文家たち」といういいまわしで、マルクスはここで、とくにカール・グリュンのようなドイツの「真正社会主義者」とか、フランスの小ブルジョア社会主義者プルードンのような俗流社会主義者を理解している。本版3巻、513〔553〕、519—523〔560—564〕ページ及び4巻124〔124〕ページ参照。 —30〔**15 ① 15（30—31）「社会主義的美文家たち」**〕

20 生産と消費の相互関係に対するセーとシュトルヒの見解にかんして、本版26巻第1部79—80〔96—98〕ページ。 —30〔**15①16（3）「言っている」**〕

21 「取引業者と取引業者の間のいわゆる交換」(zwishen dealers und dealers）について述べて、マルクスはA・スミスが流通の全ての部面を、2つの異なった部門、つまりたんに取引業者相互でのみ実現される流通と、取引業者と個別消費者との間で実現される流通とに区分したことを、考慮のうちにいれている。本版26巻第1部、104〔104〕ページ参照。 —35〔**20 ① 21（2—3）「いわゆる商売人と商売人とのあいだの交換」**〕

22 スペイン人の征服前までペルーはどのような状態であったかについての知識を、マルクスはアメリカの歴史家プレスコットの著書 History of the Conquest of Peru, with a Preliminary View of the Civilisation of the Incas 第4版、3巻本、ロンドン、1850年から得た。この本の第1巻からの抜き書きは、ロンドンで1851年にはじめられたマルクスの抜すいノートXIVに含まれている。インカが貨幣を知らなかったことにかんしては、第1巻147ページで述べられている。 —39〔**23 ① 24（23—24）「たとえばペルーのように」**〕

22[a] マルクスはプルードンの2巻もの著作 Système des contradictions économiques, ou Philosophie de la misère. I—II巻、パリ、1846年、とくに第I巻145—146ページを考慮にいれている。かれはそれをその労作『哲学の貧困』（本版、4巻129—133〔129—133〕ページ）第2章で引用し批判的検討を行っている。本版、26巻第1部36〔40〕ページとも対照のこと。 —45〔**28 ① 30（1）「(プルードン)」**〕

23 この第1の点は、マルクスがそのうちにおいて表現されているシェークスピアの現代とのかかわりをも述べようとする意図が実現していない以上、特異のしかも同様に未完成のものとなってしまったのである。ギリシヤの芸術

にかんする注をここでしるしたすぐあとで、マルクスは「序説」の作業を停止してしまった。 —47〔**30 ① 32（9）「1）」**〕

24 1843年からイギリスの発明家リチャード・ロバーツは、マンチェスターの会社「ロバーツ商会」をひきいて、さまざまの種類の道具、機械、蒸気機関を建造した。ロバーツは機械の分野では19世紀のもっとも傑出した発明家の1人であった。とくに、自動紡績機械の発明はかれのものである。

古代ローマの神ヴァルカン（かれは古代ギリシヤ神ヘファイストスに照応する）は火の神であり、あらゆる種類の金属細工の製作にかんしては極めて巧みな鍛治屋とみなされていた。 —47〔**30 ① 32（27）「ロバーツ商会」**〕

25 ジュピターは古代ローマの天の神であり、古代ローマ国民によると、古代ギリシヤ神ゼフに対応する。それの主な形容詞は「雷神」、つまり雷を放つもの、であり、それゆえ、古代の宗教によれば、かれはあらゆる天の現象をとりわけ雷光を支配した。 —47〔**30 ① 32（27—28）「ジュピター（雷神）」**〕

26 Crédit Mobilier(完全な名前は Société générale du Crédit Mobilier)は、1852年創立のフランスの大株式銀行であり、その投機的金融操作によって有名となり、ついには破産におちいった（1867年に）。1856—1857年に、マルクスはこの銀行の投機的行為にかんして、ロンドンのチャーティスト派新聞 The People's Paper とアメリカの新聞 New-York Daily Tribune のために、6本の新聞論文を書いた。本版、12巻、21—37〔20—36〕、209—217〔211—218〕、300—303〔274—277〕ページ、また同13巻79〔77〕および176〔172〕ページ参照。

古代ギリシヤ神ヘルメスは、商人の庇護者、通商と利潤の神、詐欺にかんしては大変な熟達者と考えられていた。 —47〔**30 ① 32（28—29）「クレディ・モビリエ」**〕

27 Printing House Square はロンドンのそれほど大きくない街路であり、最大のイギリスの日刊新聞 The Times の編集局と印刷所の所在地であって比喩的にいうならばこの編集局と印刷所こそは、新聞業のその卓越した組織化の点で19世紀中葉に有名となっていた。

ファーマはギリシヤの女神うわさのオッサのローマ名であり、急速に広まるうわさの化身である。 —47〔**31 ① 33（2）「プリンティングハウス・スクウェア」**〕

〔3〕 ノート I

28　マルクスのこの手稿は将来の『資本論』の最初の草案であり、マルクスによってローマ数字 I —Ⅶと記された7冊の大きなノートからなりたっている。さいごの、第7冊目のノートの表紙にはマルクスの手で、 Political Economy Criticism of (Fortsetzung) すなわち『経済学批判（つづき）』と書かれている。「つづき」という言葉はノートⅦでは先行する6冊のノートのテキストがつづいていることを示し、したがって『経済学批判』という言葉はこのすべての手稿の基本的な標題とみなすことが可能である。マルクスは手稿が未完のままとなり中断してしまっていることが理由で、この標題に（「完」というしるしではなく）「つづき」というしるしを与えた。マルクスの基本的な表題に本巻で追加した「草案」という言葉は、マルクスの1858年11月29日付エンゲルスあての手紙からとったものであり、その手紙の中で、マルクスは、自分の1857－1858年の経済学手稿についてのべてそれを Rohentwurf, つまり「草案」と名付けている。1858年5月31日付のエンゲルスあての手紙の中でマルクスはその手稿の中には、「いろいろなことがごちゃ混ぜになっており、ずっとあとの方に置くべき箇所が、たくさんあるのだ」（本版、第29巻、270〔257〕ページ参照）とのべた。

手稿はただちに第2章――「貨幣にかんする章」からはじまり、そのあとに膨大な第3章――「資本にかんする章」がつづく。手稿の最後のページにはマルクスは、商品にかんして論じられねばならない第1章の不十分なものをはじめてスケッチした。しかしそれは同時にすでにマルクスが「価値」という表題をもって登場させていたものであった。

本巻では1857—1858年の経済学手稿はマルクスによって与えられた編別を順序を追って、編、節に分けて、きわめて長い段落はより短かなものにくだいて刊行されている。テキストの諸部分の個々のおきかえは、先行するテキストに関連する補足であることがわれわれに全く明瞭であるもっともまれな場合にのみ許された。角カッコで与えられるノートの番号と手稿のページの指示はすべてのこれらのきわめてまれなおきかえに集中している。　—49

〔32ページの次の「Ⅱ貨幣にかんする章」の前にはいるべき1葉①（34ページと35ページの間にはいるべき1葉）表題『経済学批判（1857—1858年の草案）』〕

29　ゲーテの悲劇エグモントの中でのエグモントのことばに対する皮肉っぽい言いまわし（第5場、監獄、フェルディナンドとの会話）。　—58〔**39 ① 41**

(23—24)「現行の心地よい……だろうか？」〕

30　1855年5月—11月に行われたパリの全世界産業博覧会を考慮されたい。—59〔**40 ① 42 (20—21)「パリの産業博覧会」〕**

31　Crédit Mobilier にかんしては注26を参照せよ。—59〔**40 ① 42 (24)「クレディ・モビリエ」〕**

32　話題は1853—1856年のクリミヤ戦争に関するものである。—59〔**40 ① 42 (26)「東洋での戦争」〕**

33　「財産—これは盗みである」という命題はプルードンの著書 Quést ce que la propriété？（パリ、1840年）の基本的テーゼとしてつくられている。「無償信用」という理論は、プルードンによって労作 Gratuité du credit. Discussion entre M. Fr. Bastiat et M. Proudhon（パリ、1850年）の中で展開されている。この後の理論にかんしては本版、25巻第2部157〔784〕ページ及び26巻第3部550—554〔671—676〕ページを参照せよ。—62〔**43 ① 45 (12)「財産とはぬすみである」〕**

34　イングランド銀行改革に関する法律を考慮に入れよ。1844年銀行法の内容と意義にかんしては、本版、25巻第2部101—103〔713—715〕ページを参照せよ。—63〔**44 ① 46 (26)「1844年の銀行条令」〕**

35　コレージュ・ド・フランス（Collège de France）は、1530年にパリで創立したフランスの最高教育機関である。—64〔**45 ① 47 (5—6)「コレージュ・ド・フランス」〕**

36　リカードーの労作 The High Price of Bullion a Proof of the Depreciation of Bank-Notes 改訂第4版、ロンドン、1811年を考慮に入れよ。この小冊子の初版は1810年にロンドンで発行された。—65〔**45 ① 47 (29)「リカードーのパンフレット」〕**

37　ここでは、他の一連のところと同じく、「生産費」という言葉は、マルクスによって、「その価値に等しい商品の内在する生産費」（本版、26巻第3部、78〔99〕ページ）という意味で、たんに商品に含まれている労働時間部分を支払う資本家のためにではなしに、「商品そのものにとっての現実の生産費」（同、540〔660〕ページ）という意味で使われている。—68〔**48① 50 (14)「生産費)」〕**

38　銀行制限条例（Bank Restriction Act）の実施の時期を考慮に入れよ。それは銀行券（バンクノート）の強制通用力を確立し銀行券（バンクノート）の金との交換を廃止するものであった。銀行券（バンコーフスキービレート）の金との交換を行う法律は1819年に採用された。現実には〔金〕

交換は1821年までに完全に復帰された。 —71〔**50 ① 53（6）「1799—1819年においても」**〕

39 注34を参照せよ。 —73〔**52 ① 54（27）「1844年のイングランドの法律」**〕

40 土地「清掃」にかんしては本版、23巻739—741〔951—954〕ページを参照せよ。 —73〔**52 ① 54（29）「土地清掃**（clearing of the land）**」**〕

41 W・ワィトリングの労働貨幣の理論はつぎの書物で考慮された。W. Weitling. Garantien der Harmonie und Freiheit ヴィヴィス、1842年（ロシア語訳、ウイルヘルム・ワイトリング、「調和と自由の保証」M—Л., 1962年、第1部第8章、第2部第10章）。ワイトリングのこの理論にかんしては同じ本版、20巻、314〔311〕ページ、を参照せよ。 —76〔**54 ① 57（13）「ワイトリングが提案し」**〕

42 話題はマルクスの労作「哲学の貧困。プルードン氏の『貧困の哲学』への返答」にかんしてである。本版、4巻94—100〔88—94〕ページを参照せよ。 —78〔**56 ① 59（18）「私のパンフレット」**〕

43 定立（das Gesetzte）とはヘーゲル哲学の用語であって、無条件的な本源的に主たるものとは区別されて条件づけられた或るもの、即自的にではなしに、何か他のもののうちにその基礎づけをもつ或るものを、示している。本版26巻第3部130〔166〕ページの以下のことを参照せよ。「使用価値としては商品はある独立なものとして現われる。これに反して、価値としては、たんに定立されたものとして、つまり単に社会的に必要で、同等な単純な労働時間にたいするその商品の割合によって規定されているものとして現われるだけである」。 —83〔**61 ① 63（33）「措定されている」**〕

44 その手稿の多くの他の箇所におけるように、ここでは、マルクスは、自分が引用している著書（この場合には、ガニルの著書）のページでではなしに、自分の抜き書きノートのページでもって、参照ページを与えている。本版ではマルクスの書き込みノートでのページの全ての引用はマルクスによって引用されている出版物のページの引用をもって代えてある。 —84〔**これは61 ① 64（8）の「また言葉でバールに転化されている」との句に対するロシア語版の欄外挿入文への注にあたる。ただしこの挿入文は、151 ③ 159の本文右肩の「（ガニール、13、19）」と示されている文章全体をもってきたもの（原典は、**Ganilh. Des systèmes d'économique politique. Tome second. パリ，1809年，64—65ページ）〕

45 一連の他の個所と同じく、ここでは、マルクスはカント以前の意味での

《主体(スブイエクト)》という用語をつかっている。つまり、述語、特質、定義、特徴、関係の担い手という意味において。 —84〔**61 ① 64 (25) 「主体」**〕

46 The Economist (『エコノミスト』) はイギリスの経済及び政治の諸問題に関する週刊誌であり、ロンドンで1843年以来発行されている。巨大産業ブルジョアジーの機関誌である。 —94〔**70 ① 73 (4) 『エコノミスト』**〕

47 The Morning Star (『明星』) はイギリスの週刊新聞であり、マンチェスターの自由貿易主義者コブデンとブライトの機関紙である。ロンドンで1856年から1869年まで発行されていた。 —94〔**70 ① 73 (21) 『モーニング・スター』**〕

48 マルクスはここで、マルクス自身が『哲学の貧困』(本版4巻、129—133〔129—133〕ページを参照せよ) で検討し解明を行った『貧困の哲学』におけるプルードンのエセ・ヘーゲル的議論を示唆している。 —95〔**71 ① 74 (23) 「「系列」の最後の所産」**〕

49 マルクスはここで、価値尺度としての銀とヤード (長さの尺度) とかクォータ (容量の尺度) のような尺度との主な相違にかんするJ・ロックの考察 (かれが1695年に書いた論文 Further Considerations concerning Raising the Value of Money から) を簡潔に要約している。ヤードとかクォータとかがつねに購買者とか販売者の手中にあるとすれば、銀貨はたんに購入物件の尺度としての役割を果すだけでなく、まさに購買者の手中から販売者の手中に移転するものである (The Works of John Locke, in four volumes. The seventh edition Volume Ⅱ. ロンドン, 1768年, p. 92)。マルクスはこの個所を以下において完ぺきに引用している (ノートⅦ、34ページ)。 —96〔**72 ① 75 (22) 「のみ交換をする」**〕

50 マルクスは、「資財の蓄積と土地の占有との双方に先行する初期未開の社会状態のもとで」、商品の交換価値はこれら諸商品の生産にとって必要な労働時間によって規定されたという点についての、A・スミスの考察 (『国富論』第1分冊第6章のはじめにおける) を考慮にいれている (本版、第26巻第1部51—52〔59—61〕ページを参照)。

「生産費」という用語は、ここでマルクスは「商品の価値に等しい、言い換えれば、その生産に必要な労働時間の総量に等しい、それの内在的な生産費」(本版、26巻第3部、78〔99〕及び540〔660〕ページ) という意味で使っている。 —99〔**74 ① 77 (24) 「歴史に先行せしめたもの」**〕

51 Bellum omnium contra omnes (万人の万人に対する闘争) はイギリス

の哲学者トーマス・ホッブスの、かれの論文 De Civie (1642年、1668年のアムステルダム版ホッブス著作集第1巻7ページ) からの、表現であって、1651年にロンドンで公刊されたかれの英語で書かれた著書 Leviathan, or the Matter, Form, and Power of a Commonwealth, ecclesiastical and civil のラテン語の翻訳からのものである (Thomas Hobbes opera philosophica. Tomus Ⅱ. アムステルダム, 1668年、83ページ)。 —99 〔**74 ① 78 (1—2) 「すべての人にたいするすべての人の戦い」**〕

52 マルクスのこのノートは我々のもとにまで達していない。 —100 〔**75 ① 79 (4) 「私のノートⅫ, 34b」**〕

53 マルクスのこの手稿は我々のもとにまで達していない。 —101 〔**76 ① 79 (20—21) 「「私の経済についての覚え書」Ⅴページ (13、4)」**〕

54 「担保」(あるいは「社会の動産担保」) としての貨幣を特徴づけて、マルクスは、一方では、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』(第5分冊、第8章第14節) からの一つの立場を、他方では、イギリスの経済学者ベラーズによって、その著書 Essays about the Poor, Manufactures, Trade, Plantations, and Immorality ロンドン、1699年、13ページ—それは本巻第2部に掲載されている—において与えられた貨幣の規定を考慮にいれている。ベラーズについては『資本論』第1巻 (本版、第23巻142〔172—173〕ページを参照せよ)。 —103 〔**78 ① 81 (22—23) 「「社会の動産担保」」**〕

55 伝説によれば、メネニウス・アグリパは、紀元前494年に蜂起して聖山に貴族(パトリキ)の迫害に対する抗議のあかしとしてたてこもった平民(プレブス)に、胃に対して反乱をおこした人体の一部についての寓話を彼らに語り聞かせて、鎮まるように説得したという。彼の当面している社会を、メネニウス・アグリパは、この有機体の胃、すなわち貴族を養った平民をその手とした生きた有機体にたとえたのである。しかし手を胃から分離することが生きた有機体に不可避的に死を招来するがゆえに、類推すれば、平民が自分たち自身の賦役義務を拒否することは、古代ローマの国家の死滅に等しい力をもつものとなったであろう。 —106 〔**80 ① 83 (24) 「メネニウス・アグリパの譬喩」**〕

56 シェークスピア、「アテナイのタイモン」第4幕第3場。K・マルクス及びF・エンゲルス『初期の著作から』モスクワ、1956年、617—620ページ、及び本版第3巻218—219〔230〕ページと比較せよ。 —106 〔**80 ① 84 (6) 「異質なものの等置である」**〕

57 A・スミス, An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth

of Nations 第1分冊第5章「労働は価格であり、あらゆる物に対して支払われた本源的購買貨幣であった」（ロシア語訳、38ページ）。 —111〔**84①88（5—7）「アダム・スミスは……である、と。」**〕

58 A・スミスによる交換価値の特殊な労働の生産物量及び一般的な商品の量としての二重の規定にかんしては、A・スミス、An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations 第1分冊第4章、その章の冒頭（ロシア語訳、33ページ）を参照せよ。 —113〔**86①89（25—26）「交換価値の……現れている」**〕

59 ジェームス・ステュアートはその労作 An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy（第1巻、ダブリン、1770年、88ページ）において Agriculture exercised as a trade と Agriculture exercised as a direct means of subsisting（「商品経済の一部門として主導される農業経営」と「直接的生活手段の生産のために主導される農業経営」）——一定の農民経営とその家族の一との差異をみちびいている。 —113〔**86①89（31）「ステュアートが……類似のものが」**〕

60 話題は、1848年のカリフォルニアと1851年のオーストラリアとにおける豊かな金産地の発見にかかわるものである。 —113〔**86①90（12）「オーストラリア＝カリフォルニアのばあいに」**〕

61 クセノフォン, De reditibus, sive vectigalibus civitatis Atheniensis augendis 第1章第4及び第5節。Xenophontis quae extant, Jo. ゴットロープシュナイダー版 第Ⅵ巻. ライプツィヒ, 1815年、143ページ、の著作の中にあり。 —114〔**87①90（22）「人を養う土地もある。」**〕

62 注58を参照せよ。 —115〔**87①91（19）「命題」**〕

63 Strabonis rerum geographicarum libri XⅦ. Editio stereotypa. 第Ⅱ巻. ライプツィヒ, 1829年、第11分冊第4章415—416ページ。これらのギリシヤ語の引用のロシア語訳は『17分冊本のストラボンの地理学』F.G.ミシチェンコ訳、モスクワ、1879年、512ページという書物によって与えられている。

アルバノイは、クーラ川とアラクス川のほとりのカスピ海の南西沿岸の国である古代アルバニアの住民。 —117〔**90①93（25）「また彼らは重さの尺度を知らない」**〕

64 イギリス語でつくられたこの引用の典拠を確めることは成功しなかった。マルクスはそれをまた『経済学批判』（本巻第Ⅱ部、ノートB′、マルクスの

手稿14ページを参照せよ）の第1分冊の最初のテキストにも引用している。—118〔**90①94（16—18）「貴金属は……このことは妥当しない」**〕

65　ドイツ語でつくられたこの引用の典拠を確めることは成功しなかった。マルクスの手稿のそのあとのテキストは、彼がまた引用符の中にいれなかったとはいえ、全体からすれば、あるドイツ語の典拠から部分的にマルクスが縮めた抜き書きを行ったものであろう。—119〔**91①94（22）—95（5）「きらきら光る……鍍金」**〕

66　J・グリム，Geschichte der deutschen Sprache 第1巻。ライプツィヒ、1848年、12—14ページ（本版、13巻、136〔132〕ページと比較せよ）。—123〔**96①100（4）「グリム」**〕

67　マルクスは、デューロー・ド・マレによって引用された以下の著作を考慮にいれている。すなわち、J.A.ルトロンヌ，Considérations générales sur l'évalution des Monnaies grecques et romaines, et sur la valeur de l'or et de l'argent avant la découverte de l'Amérique. パリ、1817年，A・ベック、Die Staatshaushaltung der Athener，ベルリン、1817年，W・ジェイコブ、A Historical Inquiry into the Production and Consumption of the Precious Metals，ロンドン、1831年。—124〔**96①100（26）「（ルトロンヌ、ベック、ジェイコブ）」**〕

68　「マヌ法典」（「マナヴァドハルシャーストラ」）はインドにおける奴隷制国家の要求とブラーフマ教の教義とに照応した慣習法の法典編纂の早期の企ての一つであった古代インドの法令の集成である。集成の構成は神話的な人々の祖マヌ（サンスクリット語の「人」）によって編成された。集成の材料は、数百年間に蓄積され、多かれ少なかれ決定的な仕上げはおよそ我々の時代のはじめになされた。「マヌ法典」は原始的共同体組織（ペルヴォブイトナオプシチノーヴァストロイ）の多くの残滓を維持したインドにおける奴隷制社会の発展の特殊性を反映した。—125〔**97①101（28）「マヌの法典」**〕

69　ヘシオドスの詩「労働と日」151句を考慮にいれよ。—126〔**98①102（19）「ヘシオードは農耕についての詩」**〕

70　ルクレツィウス「物質の本性について」第5分冊、1287句。—126〔**98①102（22—23）「「鉄の使用が……知られていた」」**〕

71　以下の書物からとられた中国の貨幣についての知識。ギューリッヒ，Geschichtliche Darstellung des Handels, der Gewerbe und des Ackerbaus der bedeutendsten handeltreibenden Staaten unsrer Zeit. 第5

巻。イエナ、1845年、131ページ。 —127〔**99 ① 104（15—16）「外国貿易差額決済……《扱われている》」**〕

72 ポエニ戦役（紀元前264年—241年、218年—201年、及び149年—146年）は西地中海における国家の確立、新植民地と奴隷の獲得をめざす古代の2つの最大の奴隷制国家であるローマとカルタゴとの戦争である。戦役はカルタゴの壊滅に帰した。 —128〔**100 ① 104（20）「ポエニ戦争」**〕

73 マルクスによれば、ここでは、おそらく彼自身の言葉に従えば「オーストラリア、カリフォルニア、コロンビアの金産地の発見は、金の価値をもういちど低下させることになりそうである」（本版、13巻、138〔134〕ページを参照せよ）とのことからして、誤記であろう。以下の新行においてマルクスは採取方法の発展に条件づけられ、また「カリフォルニアとオーストラリアが状態を反対方向に変化するまで」、つまり金の相対的減価の方向に変化するまで継続された、銀の相対的な減価について語っている。 —129〔**101① 105（31）—①106（1）「カリフォルニアとオーストラリアの……がふたたび招来されよう。」—ロシア語版ではこの部分は「第五に」を冒頭に一つづきの文章となっている—訳者**〕

74 ギヤルニエ，Histoire de la Monnaie, depuis les temps de la plus haute antiquité, jusqu'au règne de Charlemagne. 第1巻、パリ、1819年、253ページ。 —129〔**101 ① 106（5—6）「ギャルニェ」**〕

75 アダム・スミスは貨幣を「流通の車輪」（the great wheel of circulation）と名づけている。A・スミス、An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations 第3分冊第2章（ロシア語訳、215—219ページ）。 —130〔**102 ① 106（23）「流通の車輪」**〕

76 注45を参照せよ。 —132〔**104 ① 108（27）「主体」**〕

77 マルクスはジェームズ・ミルがその著 Elements of Political Economy（ロンドン、1821年）第3章第7及び第8節においてあみだした貨幣数量説を考慮にいれている。ミルの著書のこれらの節のぼう大な抜粋を、マルクスは、ミルの見解に対するかれの批判をつけて、「経済学批判」第1分冊において、行っている（本版、13巻、160—162〔155—158〕ページ）。テキストの中で作り出しているジェームズ・ミルの誤まりの定式は、次の書物からマルクスがとり出したのである。トーマス・トウック，An Inquiry into the Currency Principle、第2版、ロンドン、1844年、136ページ。 —136〔**107 ① 111（31—33）「ジェームズ・ミルの……看過している点」**〕

78 J・ステュアート, An Inquiry into the Principles of Political Qeconomy. 第2巻、ダブリン、1770年、389ページ。ステュアートは、債務者にとって確定期日における貨幣債務の支払いのような強制的決済を「非自発的流通」と名づけている。この「非自発的流通」と区別して、あれこれの物件を購入することに対する貨幣の消費をステュアートは「自発的流通」と名づけている。 —140〔**110①116（4）「ステュアート」**〕

79 悪無限とは、以下のような範式でもって同一のことの終わりなき反復を示すヘーゲル哲学の用語である。すなわち、「或るもの」が何らかの「他のもの」となり、この「他のもの」それ自身が何らかの「他のもの」である何らかの「或るもの」であり、無限にこのようにつづくこと。 —141〔**111①117（3）「悪無限」**〕

80 マルクスはボアギュベールの労作 Dissertation sur la nature des richesses, de l'argent et des tributs のことを考慮にいれている。この労作ははじめ1697年と1707年の間に現われつぎの論集の中で再版された。Economistes financiers du XVIII-e siècle. Précédés de notices historiques sur chaque auteur, et accompagnés de commentaires et de notes explicatives, par E. Daire. パリ、1843年。「貨幣とはあらゆる物件の刑吏である」というボアギュベールの表現は上の論集の413ページにある。「暴君」あるいは「偶像」としての貨幣にかんしては395及び417ページで述べられている。本版、13巻、108〔104—105〕ページを対照せよ。—143〔**113①118（23—25）「そこからボアギュベールの……といった苦情が出てくる」**〕

81 「生産価格」（Produktionspreis）でもってマルクスは、先行する表現での「交換価値あるいは生産費」とまさに同じことをここでは理解している。「生産費」という用語はそこでは「その価値に等しい、すなわち、商品の生産のために必要とされる労働時間の総量に等しい、商品の内在的生産費」（本版、26巻第Ⅲ部、78および540〔99および660〕ページ参照）という意味にとられている。Produktionspreis という用語はすでに40年代においてマルクスの書き込み（ザピースヌイ）ノートに登場している。つまり、ルイ・セーの著書 Principales causes de la richesse ou de la misère des peuples et des particuliers（パリ、1818年）の抜き書きを行った1845年のブルュッセルのノートの中の1冊において、マルクスはルイ・セーの coût de production, c'est-à-dire, le temps et la peine consacrés á les〔sc. l'or et l' arge-

nt〕extraire et à les affiner（ルイ・セーの著書32ページ）、つまり「生産費、すなわち地中からこれら〔金および銀〕をとり出し精練するために支出される時間及び労働」という定式をドイツ語で Produktionspreis とほん訳している。 —145〔**114①120（4）「生産価格」**〕

82 交換価値にかんする章は、当時、まだ書かれていなかった。というのは、マルクスは自分の仕事を第2章、つまり貨幣にかんする章からはじめたからである。さいしょマルクスは価値にかんする章を自分の1857—1858年の手稿の末尾において書いた。その後すぐに、自分の労作の第1章が価値にかんする章ではなしに、商品にかんする章と名称しなければならないことを確信するにいたった。 —148〔**118①123（21）「交換価値そのものについて論ずる章」**〕

83 Weekly Dispatch（『週間情報』）はイギリスの週刊新聞。この名称のもとに1801年から1928年までロンドンで発行された。19世紀の50年代には、急進派的志向を保持した。 —159〔**127①（8—9）「ロンドン・ウィークリー・ディスパッチ」—ただしロシア語版では「ロンドン」の名称はなく「ウィークリー・ディスパッチ」、ロンドン、と記されている**〕

84 マルクスは、1845年3月—4月のころにブルュッセルで仕上げた自分の書き込みノートの2ページを考慮に入れている。このページはフェリエの著書 Du gouvernement considéré dans ses rapports avec le commerce、パリ、1805年の31—73ページからの抜き書きを含んでいる。フェリエはここで、銀についてのべて、それは鉱山から出てくることによって、商品となる。なぜならば、それを買うことによって直接的な需要対象としての役割をはたすからである、と。しかし、フェリエはさらにつづけていっている。すなわち「銀は、それがもっぱら貨幣となるならば、商品であることをやめるであろう。なんとなれば、この場合には、それは生産と消費との不可欠の媒体となるのであり、もはや直接にはいかなる消費をも満足させえないからである」（フェリエの著書、33及び35ページ）。 —160〔**128①134（24）「フェリエ、2ページ」**〕

85 J.B.セー、Traité d'économie politique 第3版，第2巻，パリ、1817年、432—433、461ページ。「貨幣とは、つねに流通の中に存在し、つねに交換に予定されている商品のことである…この商品の多少は、すべての他のものと同様に、当該国の総資本の多少を必ず示すものではない…、なぜなら一商品の数量の減少は他の商品量の増大と均衡しうるものであろうからであ

る」。 —160〔**128 ① 134 (25—26) 「たとえばセーは言っている」**〕

86 A.スミス, An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations 第2分冊第2章、第4分冊第1章（ロシア語訳、213—219、320ページ）。 —160〔**128 ① 135 (7) 「アダム・スミスによれば、貨幣は不生産的である」**〕

87 「貨幣の本質は物々交換のより錯綜した姿にすぎない」ということばによって、アダム・スミスの観点を、エドゥアルト・ソーリーは自分の著書The Present Distress, in relation to the Theory of Money（ロンドン、1830年、3ページ）において定式化している。スミスのこの観点はその労作An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nationsの第1分冊第4章に現われている。 —161〔**128 ① 135 (22—23) 「A・スミスが、……のは正しい」**〕

88 J.テイラー, A View of the Money System of England, from the Conquest; with proposals for establishing a secure and equable Credit Currency. ロンドン、1828年。 —162〔**130 ① 136 (31) 「テイラー」**〕

89 P.ボアギュベール, Dissertation sur la Nature des Richesses, de l'Argent et des Tributs. 論文集 Economistes financiers du XVIII-e siècle. E. デール編, パリ、1843年、399ページの中にある。本版、13巻107〔104〕ページ、および23巻152〔184〕ページを参照せよ。ボアギュベールによればつぎのように述べられている。précis de toutes les denrées（「全商品の摘要（エクストラクト）」）。 —164〔**131 ① 138 (29—30) 「貨幣は「すべての物の摘要」」**〕

〔4〕 ノートⅡ

90 Nexus rerum とは「もともと結びついている諸事物の結びつき」である。1851年にかかわり〔執筆の〕、「貨幣的諸関係の完成的体系」と目次をつけられている自分の書き込みノートのうちの1冊において、マルクスは(41ページで)、貨幣を nexus rerum et hominum（「物質と人間との結びつき」）として特徴づけている。さらに彼は34ページを引用している。直接に先行する書きこみノートのページが我々のもとに達していないために、この引用が何に関連しているかを確定することは成功しなかった。貨幣を「物質と人間との結びつき」として特徴づけて、マルクスは、すべての過去に支

配していた結びつきつまり家父長的、封建的、家族的、宗教的、強制的結びつきの崩壊が、「現金」の支配に席をゆずるに至った、人々の社会的結びつきにおける〔貨幣の〕地位を考慮にいれている。 —167〔**134 ① 141 (18—19)「諸事物を結びつけるもの** (nexus rerum)」〕

91 マルクスはカリフォルニア (1848年) とオーストラリア (1851年) における金鉱の発見を考慮にいれている。これが「ヨーロッパは革命的激動から工業熱へと転じた」(本版、13巻515〔493〕ページを参照せよ) ことを促進するものであった。すでに1850年1月、カリフォルニアの金鉱が発見されて18カ月のうちに、マルクスとエンゲルスはヨーロッパでもアメリカやアジアにおけるような全てのブルジョア社会の商業・工業発展にとっての、とりわけ新しい諸国の植民地化にとってのこの事件の巨大な意義を言及していた(同、7巻、232—233〔226—228〕ページ、また461—467〔445—450〕ページをも参照せよ)。 —170〔**136 ① 143 (29—30)「なぜなら……進行するからである」**〕

92 「貨幣にかんする章」はマルクスが1857年10月—11月に書いたものであるが、このときすでに、資本主義の歴史上、さいしょの1857—1858年世界経済恐慌を十分しっかりと認識するにいたっていた。この恐慌は合衆国にはじまって、すべてのヨーロッパの大国をおそった。 —172〔**138 ① 145 (28)「1857年」**〕

93 マルクスは自分の研究の対象の篇別を考慮にいれている。それを、かれははじめ自分の「序説」の第3パラグラフの末尾に書いたのであるが (本巻、第I部、45〔①30〕ページを参照せよ)、そこでは、自分の経済学的労作の第1篇の内容をつぎのようなことばで定式化している。すなわち「一般的・抽象的諸規定、したがってそれらは多かれ少なかれすべての社会諸形態に通じるが、すでに解明された意味においてである」。 —173〔**138 ① 146 (10)「第1篇」**〕

94 マルクスは自分の第Xノートの抜き書(ヴィピスカ)きの43ページを引用している。そこに抜き書きしているこの引用はマルサスの著書 Principles of Political Economy 第2版、ロンドン、1836年、391ページからのものである。ところが、実際には、これはマルサスの言葉ではなくて、マルサスの議論をより正確にする目的をもつ、この著書の第2版 (遺著) の編集者のことばである。 —173〔**139 ① 146 (27—28)「マルサス. X, 43)」**〕

95 〔E. ミッスルデン〕Free Trade, or, The Meanes to Make Trade Florish. ロンドン、1622年、19—24ページ。本版、13巻、113〔110〕ページ

を参照せよ。ミッスルデンは、トルコ、ペルシヤ、インドのような非キリスト教的アジア諸国とのキリスト教的ヨーロッパの通商にかんして述べている。 —174〔**140 ① 147 (22) 「ミッスルデン」**〕

96 W.ジェイコブ, An Historical Inquiry into the Production and Consumption of the Precious Metals 第2巻、ロンドン、1831年、270—323ページ。本版、13巻、117—118〔114—115〕ページを参照せよ。 —176〔**142 ① 149 (19) 「ジェイコブ」**〕

97 聖書。マタイ福音書、第6章第19節。 —177〔**142 ① 150 (10—11) 「それは虫にも錆にもおかされない財宝である」—ただし、第6章第19節ではなく、第6章第20節であろう—訳者**〕

98 伝説的なユダヤ人の創始者ヤコヴが老年に達し死期の近づいているのを予感して、自分の息子ヨシフの2人の息子に対して祝福したという聖書の物語が考慮に入れられている。古代ユダヤ人のもとで存在していた習慣にさからって、ヤコヴは、(右手をさし出すことによって)自分の主な祝福を年長の孫息子にではなく年若い孫息子ヨシフに与えたのであるが、これは年上の息子よりも年若い息子の方に輝やかしい将来が味方することを理由づけている(聖書。創世紀、第48章第13—21節)。 —178〔**143 ① 151 (6) 「あの二人息子になぞらえている」**〕

99 マルクスは、ブルュッセルですでに1845年夏に完成している自分の抜すいノートを考慮にいれている。ボアギュベールの労作からの多数の抜き書きはここで、E.デール版, Economistes financiers du XVIII-e siècle (パリ、1843年)に従って、マルクスによって行われている。。これらの抜き書きの若干のものはマルクスの評注(コメンタール)が付されている。すべてのこれらの抜き書きは原語で著書 Marx-Engels Gesamtausgabe. 第1部第3分冊、ベルリン、1932年、563—583ページにおいて公刊されている。これらの抜き書きの大きからぬ部分はマルクスによって「経済学批判」第1分冊と『資本論』第1巻に引用されている(本版、13巻、107—109〔103—106〕ページ及び23巻、152〔184〕ページを参照せよ)。 —179〔**144 ① 151 (21) 「私のノート」**〕

100 巨富で名高かったフリーギヤの王ミーダスについての古代ギリシヤの伝説を考慮にいれてみよう。この伝説によれば、ディオニュソス神が、ミーダスに対してかれの頼みで、かれが軽くふれると、それをすべて黄金に変えるという魔法の才能を自由に使わせた。ミーダスが、かれに餓死がせまっているのを納得するとすぐに、こうして食料を自分の手の中で金塊に変えた。自分

のもっている黄金に感動してかれはディオニュソスに懇望して自分の危険な魔術を取り除いてくれるようにしてもらった。 —179〔**144①152（15—16）「ミーダス**（Midas）」〕

101 〔S. ベイリー〕Money and its Vicissitudes in Value. ロンドン、1837年3ページ。本版、13巻、125〔122〕ページを参照せよ。 —182〔**147 ① 155（10）「ベイリー」**〕

102 H. シュトルヒ, Cours d'Economie Politique. 第2巻, パリ、1823年、135ページ。本版、13巻、116〔113〕ページを参照せよ。 —182〔**147 ① 155（11）「シュトルヒ」**〕

103 マルクスはサミュエル・ベイリーの著作 Money and its Vicissitudes in Value（ロンドン、1837年、9—10ページ）のうちのかれの考察を短縮した形で説明している。本版、13巻、56〔53—54〕ページを参照せよ。 —183〔**147 ① 155（19—21）「「変動する媒介物…… 表わされることがあるからである。」」**〕

104 聖書。ヨハネ黙示録、第17章、第13節及び第13章、第17節。

黙示録（あるいはヨハネ黙示録）は新約聖書に現われた初期のキリスト教文献の作品の一つである。1世紀に書かれた。黙示録の著者はローマ帝国に対する一般的な憎悪の感覚を表現し、これに対して「人非人」という名でもって烙印しまた悪魔の人格化であるとみなしている。

マルクスは黙示録をいわゆる「ヴァルガタ」、すなわちカトリックの中で一般的に使用されている聖書のラテン語訳で引用している。 —184〔**148① 156（14）「黙示録. ヴァルガタ版」**〕

105 「資本にかんする章」は1857—1858年の手稿Ⅱ—Ⅶの基本的内容を構成している。もともと—ノートⅡでは—この章は「資本としての貨幣にかんする章」（Das Kapitel vom Geld als Kapital）という表題をもっていたのであるが、そのごのノートではそれは「資本にかんする章」として登場している。 —185〔**149 ② 157「資本にかんする章」**〕

106 「経済学批判」第1分冊における類似の箇所と比較せよ（本版、13巻136〔131—132〕ページ）。 —185〔**151 ② 159（9—10）「為替相場や……同様である」**〕

107 交換過程の本質的内容が、もとは「まだまったく経済関係から分離している。なんとなればそれはなお後者と直接的に一致しているからである」という命題を、マルクスはそのごに労作『経済学批判』において発展させた。マ

ルクスは、交換過程の原始的形態である直接的交換取引〔物々交換〕の条件のもとでは、「交換価値はなおいかなる自立的形態もとりえず、それはなお直接的に使用価値と結びついている」と述べている。交換のこの発展段階の下では使用価値は富の内容、その社会的諸形態に対する「無差別性」をかたちづくる。「経済的形態規定にたいしてこのように無関係な場合の使用価値は…経済学の考察範囲外にある」（本版、13巻、36〔34〕、14〔14〕ページを参照せよ）。 —188〔**153 ② 161（24—25）「それはまだ直接的に経済的関係と一致しているから」**〕

108 単純商品経済の条件のもとでは—話題はここではこれにかんするものであるが—、労働の使用価値（研究のこの段階においてマルクスが労働の価値にかんして再び述べている）および労働の生産物の価値はお互いに一致している。労作『経済学批判』において、マルクスは資本の研究が以下の問題を解決せねばならないことを述べている。すなわち「たんに労働時間だけによって規定される交換価値を基礎としてどうして生産から、労働の交換価値がその生産物の交換価値よりも小さいという結果が生まれるのか」（本版、13巻、48〔46〕ページを参照せよ）。 —190〔**155 ② 163（10）「まだすこしも相異なるものではなく」**〕

109 セー、バスティア、その他俗流経済学者の「サーヴィス」というカテゴリーにかんしては、本版、13巻、23〔23〕ページ、23巻、203—204〔252—253〕ページ、26巻、第I部、413〔513—514〕ページを参照せよ。バスティアは、直接的交換取引〔物々交換〕の下でも、商品・貨幣流通の下でも、あらゆる商品交換を、農民、パン屋、靴職人、織匠、機械職人、教師、医者、弁護士、等々の「サーヴィス」を考慮にいれて、「サーヴィス」に対する相互の交換に帰している。F・バスティア、Harmonies économiques. 第2版、パリ、1851年87—169ページを参照せよ。 —190〔**155 ② 163（16）「なしとげたとうぬぼれている）」—注 108、109に相当する語句は、ロシア語版では「自然的多様性」の欄外挿入句とされている—訳者**〕

110 「自己の内への反照」は、ある認識された規定の自己自身の内への反射を示すヘーゲル哲学の用語である。 —191〔**156 ② 164（13）「それ自身に反射した」**〕

111 以下の書物を考慮に入れている。D. Justiniani, sacratissimi principis, Institutiones. Accesserunt ex Digestis tituli de verborum significatione et regulis juris. ハーハンのステロタイプ版。パリ、1815年、342ペー

ジ。 —192〔**157 ② 165 (25—26)「インスティトゥティオネス** (Institutiones)〈**法学階梯**〉」〕

112 F.バスティア, Harmonies économiques 第2版, パリ、1851年。—197〔**161 ② 169 (30)「バスティア君の「経済的調和」」**〕

113 マルクスは、プルードンとその追随者シエフのことを考慮に入れている。かれは、1849—1850年に Gratuité du crédit. Discussion entre M. Fr. Bastiat et M. Proudhon という名の大きくない書物（パリ、1850年）でもってバスティアの7本の応答書簡とあわせて1850年に公刊された7本の公開状の形でバスティアと論争を行った。 —197〔**162 ② 170 (14)「反対者」**〕

114 J.B.セー, Traité d'économie politique 第3版, 第2巻、パリ、1817年、428—430、478—480ページ。 —198〔**162 ② 171 (16)「セー」**〕

115 D.リカード, On the Principles of Political Economy, and Taxation 第3版, ロンドン、1821年、327、499ページ（ロシア語訳、第1巻、230、338ページ）を参照せよ。 —205〔**168 ② 177 (26—27)「「新たな労働……である」」**〕

116 本版, 第4巻、71—82〔62—74〕ページを参照せよ。 —217〔**179 ② 189 (〈手稿原注〉の22)「プルードンの愚論『貧困』」—ロシア語版では『哲学の貧困』と書かれている—訳者**〕

117 注89を参照せよ。 —220〔**181 ② 192 (12)「「すべてのものの概括」(“precis de toutes les choses”)」**〕

118 1845年3月—4月のころにブルュッセルで作成した、シュトルヒの労作 Cours d'économie politique, 第1巻、パリ、1823年からの抜き書きを含む自分の書きこみノートの中の1冊において、マルクスは、シュトルヒの労作154ページに含まれるシュトルヒの命題を、以下のように要約している。《Die menschliche Industrie nur produktiv wenn Sie einen hinreichenden Wert produziert um die Produktionskosten zu ersetzen …… eigentlich ist diese Reproduktion nicht ausreichend : sie müsste produzieren une valeur en sus》。この個所のロシア語訳は以下の通り。「人間的労働はもっぱら生産費の弁済に十分な価値をそれがつくり出すときのみに生じる……実は生産費のこの再生産は不十分である。労働はこれをこえる若干の価値を生産するであろう」。 —220〔**182②192 (21—22)「たとえば……シュトルヒを見よ」**〕

119 A.スミスの生産的労働と不生産的労働に対する見方の詳細な解釈を、マ

ルクスは『剰余価値学説』（本版、26巻第Ⅰ部、133—157〔160—192〕ページ）で行った。 —223〔**184 ② 194（32—33）「A・スミスは……正しかった」**〕

120 生産的労働と不生産的労働の問題にかんするシュトルヒ、シーニア及び他の俗流的構想にかんしては、本版、26巻第Ⅰ部、157—295〔193—368〕ページを参照せよ。 —223〔**184 ② 195（3）「たとえばシュトルヒ．シーニアはもっとくだらなくて」**〕

121 生産的労働と不生産的労働にかんする問題を、マルクスはそのご、『剰余価値学説』（本版、26巻第Ⅰ部、133—300〔166—375〕及び396—423〔495—525〕ページを参照せよ）で詳細に考察した。 —224〔**184 ② 195（25）「くわしくたちかえろう」**〕

122 注43を参照せよ。 —224〔**185 ② 195（28）「措定された」**〕

123 J．ステュアート，An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy．第1巻，ダブリン、1770年、第1分冊第16章。とくに103、105ページを参照せよ。 —227〔**187 ② 198（21）「ステュアートのいうように」**〕

124 ウエイクフィールドの植民地理論は、マルクスが『資本論』第1巻25章で考察している。 —230〔**189 ② 200（20—21）「ウェイククィールドの植民地理論」**〕

125 原語では Arbeitsvermögen。マルクスは、すでに『賃労働と資本』（本版、6巻、444〔404〕ページ）で一度あらわれ、1861—1863年の手稿において数回あらわれている Arbeitskraft という用語にかえて、1857—1859年の手稿では、通例 Arbeitsvermögen という用語を使用している。『資本論』第1巻ではこれら2つの用語は、マルクスによって同じ意味に使われている。すなわち《Unter Arbeitskraft oder Arbeitsvermögen verstehen wir den Inbegriff der physischen und geistigen Fähigkeiten, die in der Leiblichkeit, der lebendigen Persönlichkeit eines Menschen existieren und die er in Bewegung setzt, so oft er Gebrauchswerte irgend einer Art produziert》（ドイツ語4版、130ページ）。この個所のロシア語訳はつぎの通り。「われわれが労働力または労働能力（рабочая сила, или способность к труду）と言うのは、人間の肉体すなわち生きている人格のうちに存在していて、彼がなんらかの種類の使用価値を生産するときにそのつど運動させるところの、肉体的および精神的諸能力の総体のことである」（本版、23巻178〔219〕ページを参照せよ）。

ロシア語の「労働能力」（способность к труду —訳者）という表現はドイツ語の Arbeitsvermögen という用語を必らずしも十分におきかえているわけではない。ドイツ語の Vermögen はロシア語でもまた「力」（сила —訳者）と訳される。「労働力」（рабочая сила —訳者）は一般に「労働能力」（способность к труду—訳者）という表現より一層厳密に Arbeitsvermögen という言葉の意味を伝えている。したがって本巻では Arbeitsvermögen という用語は、通例、рабочая сила という用語に訳されているが、マルクスが Arbeitskraft という用語を使用している場合にはロシア語の用語 рабочая сила のすぐあとに角括孤でこの用語を与えておくことにする。 —234〔**192 ② 203（25）「労働力能」—ロシア語版 では「〔B)〕資本と労働力との交換** Обмен между капиталом и рабочей силой **」と表現されているが、ドイツ語版では「資本と労働との交換、出来高賃金—労働力能の価値—…」とある。**

126 ランゲの見解は、マルクスが『剰余価値学説』第7章（本版、26巻第I部347—352〔420—438〕ページを参照せよ）において考察している。 —242〔**200 ② 211（32）「ランゲ」**〕

訳語についての補注——注 81, 84, 90, 118 にみられる「書きこみノート」とは「ザピースナヤ・チェトラージ」（залисная тетрадь）の訳語である。なおこれを「抜すいノート」と訳さなかったのは本書では、他に「チェトラージ・ズ・ヴィスカーミ」（тетрадь с высками）という用語が使われているためである（前掲拙稿(1)7ページ〔原書Ⅶページ〕）。意味はほぼ同じものと考えられる。

（未完）